2004.10.1　第11号

吉野作造記念館だより

〈編集・発行〉特定非営利活動法人　古　川　学　人

～10周年を迎えて～

吉野作造記念館開館記念講演（1995年）

天皇・皇后両陛下ご来館（1997年）

毎回大好評の井上ひさし名誉館長の吉野講座（1998年～）

ＮＰＯ法人 古川学人運営の夏の夕涼みイベント（2003年）

戦後五十年の節目の平成七年一月、先生の誕生日に「吉野作造記念館」が落成した。

「待望の記念館がせっかく完成したのですから、目で見て学んでほしい。また、折りに触れて足を運び博士を偲んでほしい」と祇園寺先生は完成にあたっての感想を述べられている。

開館以来、毎年井上名誉館長を始め、読売・吉野作造賞受賞の先生方の記念講演会を実施し、大変ご好評いただいていることは、大勢の市民のご協力の賜物です。

平成十四年四月より、ＮＰＯ法人「古川学人」が古川市より管理運営を受託し、行政と対等のパートナーシップで取り組んでいます。

記念館並びに先生の資料等は、市民の共有財産であり、保管と活用等には十分配慮しています。

さらに民間組織ならではの柔軟な発想の下、春・夏の行事等を通じ、記念館の存在を知ってもらい、より親しんでもらうよう役職員頑張っていますので是非市民各位の一層のご協力・ご叱正をお願いします。

ＮＰＯ法人　古川学人
理事長　佐々木源一郎

これからの記念館情報

読売・吉野作造賞受賞者講演会

日時　11月20日(土)　14：00～
場所　吉野作造記念館　研修室

読売・吉野作造賞受賞者講演会は今年で６回目となります。本年度は古田博司氏を迎え、講演会を開催します。

古田博司氏プロフィール

1953年
横浜市生まれ。
慶応義塾大学
大学院修了後、
ソウル大学
大学院で学ぶ。

現在、筑波大学社会科学系教授
（東洋政治思想担当）
東アジア政治思想専攻。法学博士。
東アジアの文化に造詣が深く、その政治情勢と背後の思想を独自の視座から照射する。

著書『朝鮮民族を読み解く』
『悲しみに笑う韓国人』
『東アジアの思想風景』
（サントリー学芸賞受賞）
『東アジア・イデオロギーを超えて』
（読売・吉野作造賞受賞）など

吉野作造記念館のロゴ・マーク作品大募集!!

開館10周年を記念してロゴ・マークを募集します。
主催：古川市・特定非営利活動法人 古川学人

吉野作造記念館のロゴ・マークのデザインを公募します。テーマは「吉野作造記念館を想像・印象付ける作品」で、どなたでも応募できます。作品はＡ４サイズまでで作成したうえで、専用の応募用紙に必要事項を記入し当館までご応募下さい。応募方法は郵送または電子メール、直接当館まで持参下さい。

審査委員は佐藤一郎氏（東京藝術大学教授）、矢野正氏（プラントアーティスト）、千葉常太郎氏（油彩画家）の３人です。採用された方には直接連絡するほか、当館ホームページでも発表し、賞金として50,000円を贈らせていただきます。募集期間は2004年９月１日から10月15日までです。お申し込み、お問い合わせは吉野作造記念館までご連絡下さい。

吉野作造講座・音楽会

「天は東北山高く」―吉野作造と旧制第二高等学校―

昨年に引き続き、今年度も当館館長田中昌亮による吉野作造講座を開催します。

日にち	曜日	一　部	二　部
9/18	土	「ミスブゼルとバイブルクラスの二高生」	「吉野作造と探偵小説」
9/25	土	「忠愛之友倶楽部と道交会の確執」	「サヨナラダケガ人生ダ」太宰治と戸石泰一
10/ 9	土	「吉野作造と小山東助・内ヶ崎作三郎」	「吉野作造と黎明会」
10/16	土	「吉野作造と菊池謙二郎」	「文学作品の中での古川市と周辺の町」
10/24	日	音楽会　吉野作造少年軍歌「抜刀隊」を歌う ～ 歌でよむ「大正」という時代 ～ 時 間　18：30～20：00（入場無料）	
11/ 6	土	「吉野作造と住谷悦治」	「吉野作造と婦人サロン」
11/20	土	「第二高等学校の英才群像」	「吉野作造と古城尚友会」

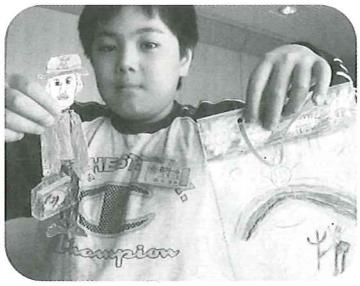
日　時　９月18日～11月20日　10：00～12：00
※10月24日のみ18：30～20：00
場　所　吉野作造記念館　講座室
※10月24日のみ研修室
受講料　1,000円（全講座分）
お申し込み、お問い合せは吉野作造記念館まで

◀昨年の
吉野作造講座の様子

これまでのイベント紹介
2004年3月～9月

GWイベント
（5月3日(月)～5月5日(水)）

毎年恒例となったゴールデンウィークの3日間子供向けイベントを開催しました。研修室では「アニメ上映会」、講座室ではおひさまの会の方々にご協力いただき「手作りおもちゃ」を作るコーナーを設けました。連日たくさんの家族連れで賑わいました。また、今回は吉野作造をモデルに作成された「着せ替え」に挑戦するコーナーを設けました。子供たちは想い想いに色を塗り自分だけの吉野作造人形を作成していました。休憩ラウンジではアイスクリームに加え、出来たての団子も販売し、幅広い年齢層の方々に好評でした。



手作りおもちゃコーナー

はり絵・着せ替えコーナー

ああ、なつかしの古川
（8月1日(日)～2日(月)）

8月1、2日の2日間「ああ、なつかしの古川」と題するイベントを開催しました。昔のおもちゃで遊べるコーナーや、昭和初期の珍しい映像を制作者や当時をよく知る方々の解説を加えて上映し、記念館は懐かしい雰囲気につつまれました。廊下では7月中旬から8月下旬まで七夕の写真を中心に大正、昭和、平成の古川の写真を展示し、多くの方々に楽しんでいただきました。また、日露戦争開戦百年にちなんで黒澤明脚本「敵中横断三百里」を上映し当館館長が解説しました。記念館では昨年に引き続き夜間開放を行い、たくさんの方々に花火大会を楽しんでいただきました。

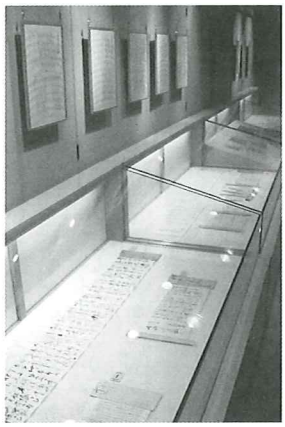
昔のおもちゃコーナー

ラウンジの様子

写真展示

新収蔵史料展
（3月21日(日)～4月18日(日)）

昨年度、吉野作造ご遺族より、色紙や書簡などの史料全87点が古川市に寄贈されました。当館では「新収蔵史料展」として、それらの史料のうち書籍を除いた37点と、新たに発見された吉野家関係写真や吉野作造自筆の書（額装）など合わせて64点にのぼる史料を展示しました。いずれも吉野の交流関係の広さを示し、新たな吉野像の発見につながる大変貴重な史料です。初めて公開されたということもあり、訪れた人々の関心は高く、熱心に見入っている様子でした。


展示の様子

読売・吉野作造賞贈賞式
（7月14日(水)）

「読売・吉野作造賞」は、2000年度より読売論壇賞と吉野作造賞（中央公論社主催）を一本化し、新たな賞としてスタートしました。本年度の受賞作は筑波大学教授・古田博司氏の『東アジア・イデオロギーを超えて』（新書館刊）です。去る7月14日(水)贈賞式と記念パーティーが催されました。選考委員会座長宮崎勇氏は「古田氏は著書の中で東アジアの『連帯性の阻害要素』として、儒教を副次的要素とする中華思想の分有を指摘している。氏は歴史的文献と自らの足で歩いた記録を含め実証的であり、文学に愛着を持つ著者らしい文章である」と総評しました。

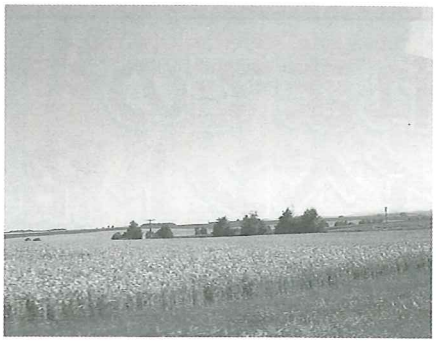
読売・吉野作造賞贈賞の様子

吉野が訪れた・・・・90年前の風景を発見！

古川では吉野作造が見ていた風景や建築物を見つけるのは容易ではありません。

しかし、日本とは気候風土の異なるヨーロッパでは、近代化を推進しながら、古い石造りの建築物を残してきました。

このほど、吉野作造が留学した時期（一九一〇～一三年）の足跡を求め、ドイツを中心に関係各所を探訪、その結果ウイーン（オーストリア）、シュトラスブール（フランス）で吉野作造の下宿先二軒を確認、さらに約五ヶ月間滞在したリーデンハイム（ドイツ）では、吉野と交流した人物のご子孫に会うことができました。


リーデンハイム付近の風景（車窓より）

吉野留学時代の下宿先住所や足取りは、当時書かれた日記や書簡に手掛かりがあります。

今回は日記の記された場所を現在の名称や住所などを頼りに、地図上へ落とすことから始まりました。その結果ハイデルベルク・シュトラスブール・プラハ・ウイーンにおける吉野の足跡のうち、三十八ヶ所の場所につき、おおよその目安を立てることができました。

七月末から八月初旬にかけ、実際に当地を訪ねると、結果は予想を越えるものでした。

まず特筆すべきは、リーデンハイムでの出会いです。

実はドイツに到着するまで現在のリーデンハイムについてほとんど知識がありませんでした。しかしこの地は吉野最初の友人グレタ・コルムシュテッターがハイデルベルクから吉野を招いた土地です。そして吉野も当時人口六七〇人程度のカトリックの小さな農村をとても気に入り、五ヶ月間滞在しました。新鮮な食べ物に温かい人情、敬虔な宗教心を抱いた人々、警察は不要なほどの治安のよさに驚嘆しながら、ドイツの地方農村に国力の源を見出しています。

リーデンハイムのオットマー・コルムシュテッター氏と1890年代の家屋

実際に訪れてみると、車なら数分で通り抜けてしまうような小さな村でした。この村には、吉野が滞在した郵便局長宅が現在も同じところに同じ職業のまま存在していました。その当時「東洋の大学教授」が来たことはこの村にとって大事件であったようです。それは「吉野先生はとてもしゃれた教授だったと聞いている」と、父親からの伝聞を当主コルムシュテッター氏が記憶していたことから想像できます。吉野が「一種の社会教育機関」と称した酒場「ドイツ皇帝のレストラン」や教会、小学校は郵便局長宅の目と鼻の先に、九〇年前とほぼ同じ姿でそこにありました。周囲には麦畑がなだらかに広がり、吉野がこの地に愛着を感じたのは、故郷古川の姿を重ね得たからではないかと思われます。

ハイデルベルグ　吉野下宿先付近の通り

ウィーン吉野下宿先
現在も学生アパートとして使用されているようだった。

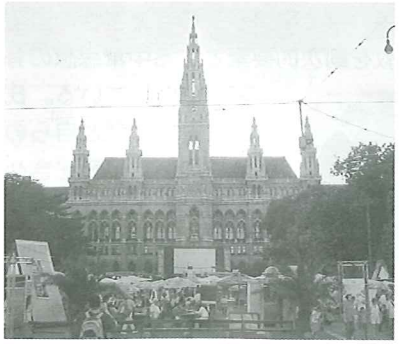
一方ハイデルベルクでの吉野の学籍簿についてはハイデルベルク大学文書館のご協力を得たにもかかわらず、不明のままでした。また、吉野は徳富蘇峰あてのハガキに「Lavithaus str. 21」と下宿先の住所を記しましたが、この住所は現在なく、「筋向う」の佐々木惣一（憲法学者）の下宿やよく食事したホテルからどんな地区に住んでいたかを推測するに留まりました。吉野ら日本人が住んでいたのは、大学や市庁舎の集中する旧市街でなく、少し離れた新市街でした。

吉野の下宿先については、今回は二ヶ所確認できました。そのうちウイーンの下宿は、ウイーン大学や市庁舎から徒歩で数分程の小路にありました。一九一一年九月十七日、吉野は朝新聞を見て食品価格騰貴に関する市民のデモがあると知り、すぐに服を着替えて市庁舎前広場にかけつけています。整然たる大規模のデモを見たことは、吉野の民衆運動観を大きく変えましたが、それもこの下宿の位置が一役買ったといえるでしょう。

さらにドイツとフランスの国境沿いの町・シュトラスブールでも吉野の下宿先を発見、滞在中語学の家庭教師とよく散歩していたオランジェリー公園の近くにその建物がありました。

他にも吉野が観光や見学した多くの場所を辿りましたが、何よりも吉野の健脚ぶりと行動力に感心しました。末筆ながら、同行の飯田泰三先生始め、丸山真男手帖の会のみなさんに感謝申し上げます。

（文責　田澤晴子）


ウィーン市庁舎と広場

大正デモクラシーと政党政治

NPO法人　古川学人　監事　佐々木　康　雄

大正天皇が即位されたのが一九一二年七月三十日、西園寺内閣時代であり二個師団増設問題で総辞職後、第三次桂内閣成立三日前の十二月十九日犬養毅・尾崎行雄らによって第一次憲政擁護運動が開始され、翌年二月民衆運動となってから一九二五年（大正十四）五月男子普選法の成立までの約十三年間を大正デモクラシー時代と呼ぶ。或いは一九〇五年（明治三十八）九月日露講和反対運動に始まり一九一九（大正八）～二十年の普選運動でピークを迎え、護憲三派内閣による普選法成立までのほぼ二十年間を大正デモクラシー時代と呼んでいる。

1 「民本主義」発展三段階論

吉野博士は憲法第一条の主権君主を認め、デモクラシーから人民主権を除いたものを「民本主義」と呼んで、ヨーロッパの例として、三段階の発展があると説いている。第一段階は王権や特権貴族に対抗する中産階級が、議会を足場にして政治的自由を訴えた段階で、その最終点は議会の多数党が内閣を組織する議院内閣制である。しかし、この段階の議会政治は有権者が限られており、政党指導者の利権ばらまきなどによる有権者の操縦が容易であり、議会政治とは本来、国民が議会を通して国政を動かすものから、政党が選挙を通じて国民を操縦してしまいがちである。第二段階はこの欠点を克服する為に、二十世紀に入って普通選挙制の導入が「民本主義」の中心課題になってきたのである。ヨーロッパでは、この第二段階は第一次大戦の勃発以前に達成されたが、普選による政党政治でも実際には下層大衆の社会的・経済的な幸福をもたらさなかった。そこで第一次大戦頃から普選という政治的平等から一歩進んで、社会政策・経済政策による所得の再配分・経済的平等の実現が、「民本主義」の主要課題となった。これが民本主義の第三段階である〈i〉。

2 「桂園時代」の終焉

第一次護憲運動は「民本主義」第一段階の実現を求めた運動であった。二個師団増設問題に端を発した陸軍の横暴にたいし、亦「閥族打破・憲政擁護」のスローガンを揚げた数万の民衆が議会を包囲して、新聞社投石・放火・交番焼討などの暴動は桂内閣を総辞職に追い込んだのであった。一九〇〇年十月から続いた立憲政友会と山県閥系内閣が交互に担当した「桂園時代」の終焉を意味した。

一九一四年四月（大正三）非政友会系の立憲同志会と中正会を与党とする第二次大隈内閣が成立したとき、吉野は、「日本において政党内閣が出現した、或いは出現しかかったといふことを申すならば、明治三十一年六月憲政党内閣のことは暫く置き、先ず今度の大隈内閣を以って其の端緒を開いたと云わねばならぬ〈ii〉」と高く評価している。ということは、「桂園時代」の伊藤博文・西園寺公望の政友会内閣を「政党内閣」とは認めていなかったのである。

3 原敬政友会内閣成立

第一次世界大戦の本格化の中で日本経済が飛躍的に発展すると、再び政友会の時代がやってきた。山県系寺内内閣から禅譲された原内閣が、一九一八年（大正七）九月成立すると世論は爵位を持たない「平民宰相」・本格的な政党内閣として好意的に歓迎した。吉野は「原内閣に対する要望〈iii〉」で善政主義を期待した。

経済的好環境の下で政権に付いた原内閣は、①教育施設の拡充②交通機関の拡充③産業・通商貿易振興④国防の充実という積極政策を公約し、実行してゆくことによって地方有権者の圧倒的支持を獲得した。しかしながら、「我田引鉄」とまで云われた積極政策は選挙対策の目玉であり、結局は利権のばら撒きであった。

翌年三月に有権者の納税資格を直接国税十円から三円に大幅に引き下げたが、地方有権者を増加し満足させても都市中間層の大部分は、この選挙法改正によっても有権者になれなかったのである。政友会が普選それ自体に反対であり、民党（憲政会・国民党）が普選法案を提出すると衆議院を解散（普選解散）、第十四回総選挙で政友会絶対多数を獲得すると、政友会は普選に対する国民の審判は下ったという態度をとり続けたのであった。

吉野は「中央公論」大正九年四月号で「国民の一人として政友会と原内閣と原首相その人をも信頼する能わざることを断言することを憚らない。〈iv〉」と強く非難している。

「大正時代を通じてもっともすぐれた民主主義的思想家であった吉野作造が、生涯を通して政友会とその指導者原敬を嫌い抜いたのには、それなりの理由があったのである〈v〉」。

4 浜口雄幸民政党内閣

一九二〇年代の国内政治の最大の争点は普通選挙法であって、普選要求運動は啓蒙運動の域を脱し、生活改善の為の政治的自由の実現として要求した全国的政治運動になっていった。第二次護憲運動であった。その間政友会は分裂し中間内閣時代を経て、加藤高明護憲三派内閣の時代に入って普通選挙法がようやく実現し公布された。

普通選挙後最初に登場したのが浜口内閣であり、一九三〇年二月の総選挙で民政党勝利を背景にして、ロンドン海軍軍縮会議でその協定に調印した。これに対して、海軍軍令部・枢密院・政友会から軍令部部長の不同意を無視して調印したのは、憲法第十二条（編成大権）に違反する「統帥権干犯」であると攻撃された。

浜口は条約上の兵力量を決定するのは海軍省を含む政府の責任でありとして、内閣の軍部に対する優越性を主張し、更にその決定に関する憲法上の学究的論議は、それぞれの研究者に任すべきものであると反駁し、政党内閣の首相にふさわしい堂々たる発言であった〈vi〉。この点、吉野の軍令権と軍政権とを分けて考えた「帷幄上奉論〈vii〉」と浜口の主張は良く似ており、議会の多数を背景にした政治は戦前日本でもっとも民本主義的な内閣であった。

しかしながら、政党内閣は一九三二年の五・一五事件で倒れた犬養内閣でもって終焉し、吉野の民本主義発展論の第三段階は十数年間途絶えてしまい、戦後日本に委ねられたのであった。

主な参考文献

〔一〕坂野　潤治「日本政治史」
明治・大正・戦前昭和
放送大学教育振興会　二〇〇二年
〔二〕松尾　尊兊「大正デモクラシー」
岩波書店　一九九四年
〔三〕有馬　学「国際化の中の帝国日本」
〔日本の近代4〕
中央公論社　一九九九年
〔四〕北岡　伸一「政党から軍部へ」
〔近代の日本5〕
中央公論社　一九九九年
〔五〕吉野　作造「帷幄上奏論」
〔日本の名著48〕
中央公論社　一九七二年

脚注

〈i〉〔一〕一三七頁～一三八頁
〈ii〉〔一〕一四一頁
〈iii〉岡義武　編『吉野作造評論集』
一三二頁　一九九三年　岩波文庫
〈iv〉岡義武　編『吉野作造評論集』
一六一頁（原首相の訓辞を読む）
〈v〉〔一〕一二七頁
〈vi〉〔一〕一六五頁
〈vii〉〔五〕一九〇頁～一九一頁

平成十六年（二〇〇四）九月一日

教員長期社会体験研修を終えて

二〇〇四年七月一日から一ヶ月間、当館ので教員の社会体験研修を行いました。その感想文を紹介します。

記念館での一ヶ月

涌谷町立涌谷第一小学校教諭
菅原晃敏

私は、七月一日から一ヶ月「教員長期社会体験研修」で吉野作造記念館にて研修させていただきました。来館者の受付や資料管理など、ふだん経験できない様々な仕事をさせてもらいました。また、研修の時期がちょうど夏のイベント「ああなつかしの古川」の準備期間と重なっていたこともあり、イベントへ向けた裏方の仕事を実際に体験することもできました。記念館を身近に感じてもらい、多くの方に足を運んでもらうため日々努力している記念館の方々の姿がとても印象的でした。小学生向けのイベントでも、子どもの目線で考え、子どものためになりそうな企画を実践されていることに感心しました。私は今年で教員生活も十六年目になりましたが、子どもが目を輝かせて取り組む授業や楽しくて、来るのが待ち遠しくなるような学級作りについては日々頭を悩ませているところです。その点、記念館の方々には多くのヒントをいただいたような気がします。

学校教育と社会教育は車の両輪にたとえられ、お互いに連携を取り合うことがとても大切だと言われています。記念館には、学校にはない豊富な史料、そしてそれらの史料や吉野博士に精通している職員の皆さんがいます。これは記念館の「財産」であり、私たち教員のおよばないところです。博士が唱えた民本主義はもちろん、博士の生き方や人柄には学ぶべき点が数多くあります。授業で博士を取り上げる時には、記念館の皆さんに力を借りていきたいと思います。

本当にありがとうございました。記念館で学んだ多くのことをこれからの教員生活に生かしていきたいと思います。

社会体験研修の様子

「ああ、なつかしの古川」ボランティア参加による感想文紹介

当館では「ゴールデンウィークイベント」に引き続き「ああ、なつしかしの古川」でもボランティア募集を行いました。その中で協力を頂いた方々の感想文を紹介します。

宮城誠真短期大学　一年　及川由起子

ゴールデンウィークに続いて二回目の参加で、暑い中での休憩ラウンジのお手伝いでしたが、普段はすることのない販売・接客をし、とても貴重な体験となりました。

今年から古川の短大に通っている私は、毎日車での家と短大の往復で、古川を知りたいと思ってはいるものの、なかなかその機会がありませんでしたが、このボランティアを通して、古川の人達と挨拶程度の会話ですが接することができ、とても嬉しかったです。

私の地元は海の町で、浜の性格からなのか話し方に勢いみたいなものが感じられますが、古川は内陸の性格からなのか、話していて穏やかさを感じました。人は皆、温かさを持っていますが、同じ温かさでも、地域によって表現の仕方が違うんだなと、楽しい発見もありました。

二年生になったら実習・就職活動と忙しくなるので、一年生の今の時期を大切にし、できるだけ多くのボランティアを通し、たくさんの人達と出会っていけたらなと思っています。

学生にとって地域の中に入って行くということは、「自分が受け入れてもらえるのだろうか」という緊張・不安が、どうしても伴うものですが、講義にはない、実践を通しての成長ができる場だと思います。

これからも、地域、学生が一体となって古川を盛り上げていける様、無理をせず頑張っていきたいと思います。

宮城誠真短期大学　一年　塩崎由梨香

「ああ、なつかしの古川」と題し、昔の古川を知って頂く為に、昔の遊びや、昔のなつかしい古川の映像、ビデオ上映、そして写真展示などたくさんのコーナーを用意して、そのイベントのお手伝いとして七月三十一日、八月一日、二日と三日間、吉野作造記念館でボランティア活動に参加させて頂きました。

最初は、来て頂いたお客様にどう接すれば良いか、そしてどのようにすれば良いか楽しんで頂けるかなど、何をどのようにすれば良いか戸惑い、不安や期待が入り混じった状態でしたが、時間が経つにつれ、皆さんにサポートして頂きながらもだんだん慣れ不安は取り除かれて行きました。昔のおもちゃコーナーでは、子供達はめずらしそうに手を取り、遊び方を教えてあげるとすぐにコツをつかみ、夢中になって他の子に負けまいと遊びを楽しんでいました。大人の方々は、「自分達の子供の頃は…。」と、とてもなつかしそうに昔の事を思い出しながら、子供に戻ったかのように遊びを楽しんでいました。幅広く、子供から大人の方まで楽しんで頂けたのではないかと思います。たくさんの人達と触れ合い、普段の生活の中では感じることのできない味わえない経験ができました。三日間、とても充実した時間を過ごさせて頂きました。

七夕飾り作成の様子

古川高校感想文紹介

～吉野作造記念館を訪ねて～

2004年2月に古川高校一学年6クラスが来館しました。その感想文を紹介します。

一年四組三番　安間　昭太

今回の吉野作造記念館への訪問と見学は二回目となる自分にとって最初はとても退屈なものになってしまうなぁと思っていました。しかし、社会経済を学び、理解しつつあるような状態であらためてみると、また違った角度から見ることができ、とても新鮮なものに感じることができました。

見学したものの中で一番印象に残ったことは、吉野作造の人間性です。自分が偉い立場の人間になっても決して気どらず後輩である鈴木文治を素直に先輩、後輩の枠を超えてほめ讃えることができるひたむきさや何でも自分が良い事だと思ったらすぐに実行に移そうとするものすごい行動力、そしてこれからのことを自分の体力や健康をかえりみずに実現できる強い精神力の持ち主であるというような説明を見たり、聞いたりするだけで吉野作造という人間がとても努力家で素晴らしい人であったということがあまり吉野作造を知ってはいない私でも手に取るように浮かびあがってきました。

吉野作造の偉大さを感じて、後輩である私はそれを誇りに思い、何事もまずはひたむきにやっていこうと思わされました。そしてそのひたむきさがいつか花開くことを願いたいです。

改めて忘れていたことを学ぶことができました。本当に有難うございました。これからの生活に是非役立てていこうと思います。

一年三組十九番　佐々木孝誠

吉野作造記念館を訪ねて、まず僕が思ったのは、こんな立派な施設が身近な所にあったなんておどろきだということです。シアターや展示室が完備された、とても近代的なつくりにおどろかされました。まさに灯台もと暗しだと思いました。展示室の展示品等には本の中の人だった吉野作造が本当に生きた証がたくさんあり、古川出身の人としてもっと吉野作造を身近に感じることができました。

シアターでの吉野作造の生涯をふり返る映画を観て、吉野作造がこれほどまで有名になった理由が分かりました。今でこそ、インターネットが普及し、言論の自由が保障されていますが、吉野作造がいきた時代は天皇が絶対的な力を持っていた時代です。そんな時代の中にあっても、自分の理念を曲げずに、民衆にうったえることは本当にすごいことだと思います。今の時代に比べたら、その難しさは格段に大きいはずだからです。

吉野作造は、僕に自分の考えを持ってそれを貫くことの大切さを教えてくれました。そういった人達がいたからこそ、今の平和な日本があって、そういった人がいるからこそ、これからの日本の未来は明るいのだと思います。そういった人の一人に、僕もなれたらいいと思います。

一年一組五番　上埜　豪

私は正直言ってあまり吉野作造について関心がなく、「宮城県出身の偉い人」という様なイメージがあるだけだった。だが実際に吉野作造記念館に行ってみて、その私のイメージはより具体的に深まっていった。

私は記念館が古川にあることは行く以前から知っていたが、中に入って見学したことはなかった。そのためどんなことを学ぶことができるか、などを頭の中で考えながら記念館へ入った。記念館では、吉野作造の生きた様を伝えるビデオ、吉野が実際に使ったものが展示されていた。これらを体験し、私は吉野作造のすごみに気付いた。彼は一生涯学問に励み、民衆のために「民本主義」を唱えて世の中を変えようとしたのである。堂々と自分の意見を曲げないその彼の姿勢は、彼の知識、努力、勇気を象徴しているのではないだろうか。決して一般人にできる行動ではないと私は思う。

今の私ははっきり言って優柔不断だ。他人の意見ばかり気にし、自分が本当に思っていることをはっきり発言することができていない。だが、私は吉野の勇気ある行動に触発されて、自分の意見をはっきり言おうとするようになった。これからは吉野の様に努力、勇気を忘れずに進んでいきたいと思う。そうすればきっと吉野作造の様な素晴らしい人間になることができるはずだと私は思う。

二〇〇四年三月～八月　寄贈資料一覧

多くの方のご厚意を得て貴重な資料をご寄贈いただいております。厚く御礼申し上げます。

順不同
敬称略

〈資料名〉	〈寄贈者〉
『近代日本研究』　第20巻　他1点	慶應義塾福澤研究センター
『新明社会学研究』　第8号	山本鎮雄
『比較文学』　第43巻（複写）	和泉敬子
『同志社談叢』　第24号抜刷「社会主義詩人児玉花外の研究（一）」	太田雅夫
『博物館学入門　―地域博物館学の提唱―』	金山喜昭
『東北大学百年史八　資料一』	東北大学百年史編纂室
『自由思想』　第95号　第96号	石橋湛山記念財団
『東北学院資料室』　第3号	東北学院資料室
『講座日本歴史』　第1巻～第13巻　他22点	佐々木源一郎
『国際連盟協会　会員名簿』　他13点	佐々木一郎
『大槻文彦先生像除幕記念』　9冊　他1点	米城正興
『日本の時代史24　大正社会と改造の潮流』	吉川弘文館
鶴見祐輔より阿部孝あてハガキ　他29点	菅原一也
『思想史から見る日本の歴史』	小野寺満
『国際日本学論叢』　第1号	白山映子
『戦争が遺したもの』	万城目牧子
『夢の泪』	井上ひさし
『ウーラノス』　第13号	東北学院大学調査企画課
『東アジア・イデオロギーを超えて』	読売新聞東京本社

利用案内

開館時間
午前9時～午後5時まで（入館は4時30分まで）

入館料
一般　310円　高校生　210円
小中学生　100円
（団体20名以上、割引有）

休館日
月曜日（但し祝日・振替休日に当たる場合は翌日）
年末・年始

バックナンバー

「吉野作造記念館だより」1号～10号
ご希望の方は記念館まで。
（※一部コピーで対応しております。ご了承下さい。）

ご寄付をいただいた方々（順不同 敬称略）

竹中八夫　和泉敬子
美津子　鈴木大吉

開館10年おめでとうございます。
郷土の誇りである吉野作造博士の偉業を顕彰し「民本主義」の精神を広め第二の吉野が誕生することを目標に昭和37年より活動しています。
新会員を募集しています。

吉野先生を記念する会 会長　高橋　よし子

●各種印刷・製本
●Mac Windows DTP
(株)小野寺印刷所

吉野作造記念館
〒989-6105　宮城県古川市福沼1丁目2番3号
TEL 0229-23-7100　FAX 0229-23-4979
E-mail　yoshino-npo.fg@blue.ocn.ne.jp